海外学界ニュース

韓国佛教史蹟踏査記

村松法文

朝鮮半島に中国から佛教が伝わったのは、高句麗・百済・新羅の三国鼎立の時代であった。高句麗への伝来は、小獣王二年（三七二）に前秦の王符堅が僧順道を高句麗に遣わして、佛像経文を送ったという。（『三国史記』巻十八・『三国遺事』巻三）百済へは、枕流王元年（三八四）に東晋から胡僧摩羅難陀が来、翌二年（三八五）漢山に佛寺が建てられた。（『三国史記』巻二十四・『三国遺事』巻三）更に新羅に伝わったのは、訥祇王十六年（四一七）に高句麗から僧墨胡子が来たとし、或は法興王十四年（五二七）に阿道和尚が来たのを以て佛法のはじめという。（『三国史記』巻四・『三国遺事』巻三）

日本の古代統一国家が形成される時期、朝鮮半島からは進んだ文化を持った人々が数多く新天地を求めて渡来した。既に佛教の盛んであった彼らの故国から、佛教はこれら帰化人と共に伝わり、やがて日本の民衆に伝播する。日本への佛教の公伝は、百済の聖王が扶餘に都を定めた五三八年、日本では欽明天皇七年であるとされる。爾来、日本へ伝えられた百済の佛教は、中国南部と関係の深かった百済の事情から、梁の成実論を主とした佛教学であり、その上に立って涅槃経・法華経・維摩経・勝鬘経・般若経などの研究がなされていたものと推定されている。次いで新羅時代には華厳宗が盛んになり、元暁・義湘をはじめとし、唯識の円測・太賢・明朗・憬興、禅宗の信行など日本の佛教界へ与えた影響は大きい。

今回、日本佛教伝来の故郷ともいえる韓国の佛教史蹟を尋ねる旅が計画され、本学の横超名誉教授を中心に、三桐・江上・若槻・木村の各先生方と、四天王寺女子大の藤田・水尾両教授、元金沢大教授の橋本芳契先生ら一行二十名の団体の一員として参加し、九月一日から六日まで、韓国の南から北へ、数多くの寺院・佛教史蹟・博物館を歴訪した。以下これら韓国の佛教史蹟・文物について日程の順に記してみたいと思う。

梵魚寺　釜山の金海空港に着いた一行は、市内で昼食ののち、海岸線に沿って海水浴場として有名な海雲台の浜辺を見ながら、約四十分位バスにのり、最初の訪問先である梵魚寺へ着く。緑の木立の中に清らかな渓流の音を聞きながら坂道を登ると、「魚山禊補寺有功碑」の石碑がある。「魚山」は中国山東省にあり陳思王曹植によって梵唄のおこった所とされ、「魚山」の名を有すこの地も亦声明と縁の深い所なのであろうか。進むと「禅刹大本山金井山梵魚寺」の額を掲げた曹渓門がある。一列に並んだ四本の石柱で大きな屋根を負っており、こうした形を一柱門というそうだ。日本では見ることのできない珍らしいもので、まさに異国へ来た感が強い。次は天王門で丹緑に彩色さ

れた四天王像が異様。不二門を過ぎると善済楼、大雄殿がある。観音殿ではちょうど勤行の最中で、五体投地の僧は敬虔そのものである。梵魚寺は、『朝鮮佛教通史』（李能和著）によれば、新羅興徳王十年乙卯（八三五）に創建されたというが、他に文武王十八年、或いは十九年（六七八・六七九）の説もある。しかし、『三国遺事』によると、「義湘が新羅文武王十六年（六七六）に浮石寺を建て、更に十ヵ所の寺に令を下して教書を伝えた」といわれ、その中に「金井之梵魚」の名が見える。（『三国遺事』巻四、義湘伝教）又、新羅末の碩学崔致遠が書いた『唐大薦福寺故寺主翻経大徳法蔵和尚伝』（大正蔵巻五十所収）の中にも海東華厳始祖としての義湘に関しての所で、「海東華厳之所有十山」の一つに「良州金井山梵語寺（大正蔵で語となっているが魚の誤）の名があげられていて、『三国遺事』の記事と一致している。このことから推せば、梵魚寺は義湘のこの時より遡って以前の草創ということになろう。梵魚寺には他に、冥府殿・羅漢殿・龍華殿・毘盧殿などがある。死者追悼・弥勒信仰・華厳の伝統など、韓国佛教の特色が窺われる。これらの建物はいずれも壬辰の乱（一五九二年、秀吉の朝鮮出兵、文禄の役を韓国側からは壬辰の乱という。）の兵火に焼かれ、李朝の光海君五年（一六一三）の再興になるという。

通度寺　梵魚寺を後に、一行は釜山とソウルを結ぶ京釜高速道路を走る。道路はよく整備されており、広々とした黄金色の稲穂が美しい。やがて慶尚南道梁山郡にある霊鷲山麓の通度寺に着く。この山は印度の霊鷲山に似るに因んで名づけられたそうだ。バスを降りて清澄な流れにかかる無風橋を渡る。鬱蒼とした松や欅の古木の中を清流に沿って参道は続く。暫く進むと新羅の古刹通度寺の総門である一柱門があり、「霊鷲山通度寺」の扁額を掲ぐ。総門の手前にある建物に「通度寺職場民防衛隊」の門札が見え、準戦時下の韓国を垣間視る。第二門は四天王門であり、次の第三門不二門は目下修理工事中。これらの門の順序は梵魚寺でも同じであった。正面に大雄殿の大伽藍が目に入る。屋根の上の線と軒先の反りが描く曲線が美しい。この曲線こそ韓国の美だとガイド女史が力説する。軒先の反った屋根は寺院だけでなく民家もそうであり、韓国建築の大きな特色である。通度寺はもと入唐僧慈蔵によって創建された。慈蔵は唐の貞観十年（六三六）に入唐し、同十七年（六四三）に帰国、一世の尊敬を集めた高徳である。『三国遺事』によれば、「善徳王の乞いによって唐から帰国した慈蔵は芬皇寺に住していた。このころ国内の人で戒を受けて佛を奉ずる家は十中八九で、髪を剃って僧になりたいと願い出る者が年々増えたので、通度寺を建てて戒壇を築き、四方から来る者を受け入れた」という。（巻四・義解第五・慈蔵定律）また、「慈蔵が唐から持ち帰った舎利は三つに分けて、その一つは皇龍寺の塔に、他の一つは太和塔に、残りの一つは同じく持ち帰った袈裟と一緒に通度寺の戒壇に在る。その通度寺の戒壇は二段からなっていて、上段には鑊を伏せたような石蓋が安置されている」と記されている。（巻三・塔像第四・前後所将舎利）大雄殿の建物は又「金剛戒壇」の扁額も掲げており、大雄殿としての佛像は安置されてい

ない。この建物の裏に四方四十六尺の石造露天の戒壇がある。戒壇は二層の壇を築き、周囲には四金剛・十二神像が刻まれ、壇上中央に蓮花台の石鐘型の舎利浮屠がある。これは『三国遺事』の記事と符合するものである。慈蔵の入唐が、唐の律宗の祖道宣（五九六―六六七）の在世中であり、この戒壇の構造はその道の研究者にとっては大いに注目を引くところである。壬辰の乱で通度寺も戦禍を被るが、李朝宣祖三十六年（一六〇三）佛舎利塔を重修して舎利を還置したという。ガイド女史の説明によると現存の大雄殿の基盤にも、壬辰の乱の傷跡がはっきり認められるという。全ての建物は焼失したが、五弁二重の花が刻まれている大雄殿の基盤の石組みの段は創建当時のままながら、花崗岩のこの石は戦火で薄茶色に変色してしまっている。石が語りかける無言の歴史を感ずる。甘露殿の前の五重の石塔も創建当時のものと伝えられ、新羅の塔の面影を止めている。この他、創建の頃の伝説を伝える九龍神池や、慈蔵の肖像画を安置する開山祖堂があり、龍華殿の前には釈迦佛が未来世の弥勒佛に伝えるという石造りの「佛器」があって珍らしい。大光明殿はこの通度寺で現存する最も古い建物で、約六百年前の高麗末の建立という。いかにも歴史を感じさせるその建築は、彩色は落ちてはいるが、正面の柱の上の二つの龍の彫刻がすばらしい。又、梵鐘閣は李朝の粛宗十二年（一六八六）に創建されたものという。二階建ての上部に弘鼓（太鼓）と木魚をのせ、下に梵鐘と雲板を据える。これらは「四物」と称され、韓国寺院の特色ある佛具の構成である。梵鐘が階下に釣され、地上わずか三十cm位しか上っていない。こうしたことは日本の鐘楼では全く見かけない所、奇異に思いながら通度寺を後にした。

三体石佛　通度寺から再び京釜高速道路を走って、慶尚北道に入り、新羅千年の都慶州に至る。途中、松林の中に数多くの土盛りをした小さな丘が目つく。あれは韓国固有の土葬の墓だそうだ。何の墓標もなく松林の中に点在する土の小山は、そこに生きた名もない人々の集会場ともいえよう。慶州の市街地の南の丘陵地帯、南山に三体石佛がある。夕闇迫る松林の中に石佛が森厳の気と共に立っている。釈迦佛を中央にして左右に菩薩像が並び、何ともいえぬ穏やかな微笑を浮かべている。南山には多くの石佛・磨崖佛が散在する。この三体の石佛も初めからこの場所にあったのではなく、別々の所から集められたものだという。これらの石佛は三国時代のいわゆる古新羅末の作で、中国隋の様式を思わせる。しかしいずれも、後世李朝、特に燕山君（一四九五―一五〇五在位）の排佛によって、古い石佛なども多く被害を被り、この石佛の鼻も無惨にも欠かれてしまっている。一行は藁葺屋根の農家が残る古く静かな慶州で韓式の夕食をとり、韓国の第一夜を佛国寺観光ホテルに過した。

石窟庵　石窟庵から見る東方海上の日の出は無比の絶景だということで、まだ薄暗い早朝五時にホテルを出発した。三十分ほど走ってバスを降り、そこから木々の茂る朝靄の山道を歩く。冷やりとした朝の空気が心地よく、歩くにつれて次第に囲りが白々としてくる。だがあいにくとこの日は曇って霧が濃く、東方の海上から登る朝日は拝せなかった。この山は吐含山とい

うが、霧が多くて山が見え隠れするさまは、麓から見ると山が霧を吐いたり含んだりしているようなのでこの名がつけられたとのことであった。石窟庵は吐含山の中腹にあり、新羅第三十五代の景徳王五十年(七五一)、大相金大城が佛国寺を再興したと同期に、前世の父母の為に石佛寺を建立したことが『三国遺事』に記されている。(巻五、孝善第九・大城孝二世父母 神文代)今、石佛寺はなく、寺に付属したこの石窟庵のみが残っている。多くの参拝者に押されながら石室の正面に出る。スポットライトに照らされて、釈迦如来坐像が石室中央にくっきりと浮び上る。乳白色の花崗岩の尊像に思わず感嘆の声が上る。丈六の釈迦坐像は蓮華座の上に安置され、全体として豊かな、そして謹厳な印象をうける。左手は膝の上にのせ、右手を伏せて垂れており、その相好は降魔触地の印相といえよう。統一新羅時代の釈迦像の代表的な印相であるが、日本では見ることができない。筆者の乏しい朝鮮佛像に対するイメージとしては、法隆寺の百済観音や広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像などから受ける、全体として扁平で細い体軀の佛像の印象からしてみると、この石窟庵の釈迦像はまるでちがう。円く張った頬、堂々とした肉づき、ゆったりとした膝、それらの豊かな印象は強烈なものであった。石室の入口から八部衆・四天王像・十大弟子が左右に並ぶ。それぞれ一枚づつの花崗岩に半陽刻されて、石室を形造っている。昨年まではこの石室内へ入れたそうだが、保存の為ということで今はガラス板で入口を覆い中へは入れない。本尊の真裏の十一面観音像が傑出したものというが、残念なことに見ることはできない。石窟庵の参拝を終えた頃、すっかり明るくなり、一旦ホテルへ戻り朝食をとる。

佛国寺　佛国寺は、石窟庵のある吐含山を望む山麓のこんもり茂った松林の中にある。「佛国寺」の扁額を掲げる門を入り、実に手入れのよく行き届いた参道を進むと、目の前に高々とした二層の石階・二重の石橋の上に紫霞門がそびえる。まさに統一新羅王朝の威容を誇る景観に圧倒される。佛国寺の草創については、新羅法興王十五年(五二八)又は法興王二十二年(五三五)といわれ、その後幾度かの重興を経て(『朝鮮佛教通史』下編一八五頁)、統一新羅時代の景徳王十年(七五一)に金大城によって大きく寺観を整えたという。『三国遺事』にはこのことが詳しく、「金大城は現世の両親の為に佛国寺を、前世の父母の為に石佛寺(石窟庵)を建て、神琳と表訓の二人の聖師を招いて住まわせた」と記している。更に『寺中記』によるとして、「景徳王十年(七五一)に佛国寺を建て始め、恵恭王十年(七七四)十二月二日に大城が亡くなったので後は国でこれを完成した。初めは瑜伽の大徳降魔を招いて住まわせた。この二つの伝はどちらが正しいかわからない」と記している。(巻五、孝善第九・大城孝二世父母 神文代)しかしながら現在の佛国寺は壬辰の乱によって焼失し、その後、李朝二十二代正祖王(一七七七―一八〇〇在位)の時に再建が始められ、現在も政府による復元工事が進められている。金大城によって整備された往時の寺域は現在の十倍にも及ぶというから、その規模は如何ばかりであったろう。紫霞門にかかる石橋は白雲橋・青雲橋とい

い、新羅の優れた石造技術の精巧さにただ驚嘆するのみである。大雄殿の前に左右に釈迦塔と多宝塔がある。釈迦塔は高さ八米余の三層石塔で、二層の基壇と、その上に三層の塔身をのせ、更に相輪が立つ。これら上下の釣合のとれた構造は安定感があり、新羅石塔の一標準を示す代表的なものといわれる。一九六六年に第三層から舎利荘厳具一式が発見され、中に木版の無垢浄光陀羅尼経が含まれていたと報告され、世界最古の木版印刷として話題を呼んだ。又この釈迦塔と相対する多宝塔は、高さ十米余、二層方形の基壇があり、第一層基壇は四方に石階があり、第二層の四隅に石柱を建て、中央にも方柱がある。この柱の上に幅広の薄い石板をのせ、その上に方形の欄干をめぐらし、その中に八角形の三層の塔身がある。これにも八角の欄干がめぐらされ、八角形の屋蓋石の上に相輪がある。この多宝塔の造りは石造りでありながら、木造建築の如く細部の精巧な造形美を見せており、新羅の伝統的な形式と異った特殊な石塔である。日本で多宝塔といえば、石山寺や高野山のそれを連想するが、それらとは全く似ても似つかぬ形をしている。この釈迦塔の端正な方形の塔と、多宝塔の精巧を極めた八角塔の双塔形式は新羅石造美術の第一といわれる。言うまでもなくこの釈迦塔・多宝塔双塔の形は法華経の説相によるものである。先の石窟庵の小龕の内に維摩居士の像があるということであり、佛国寺・石窟庵創建当時の新羅の佛教界と、法華経・維摩経の関係が窺われよう。更に大雄殿の奥に近年再建された無説殿がある。また毘盧殿の本尊、毘盧遮那佛は景徳王時代の作とされ、統一新羅時代の三大金銅佛の一体である。結跏趺坐の半丈六の像で智拳印を結ぶ左右の手が、金剛界曼陀羅の大日如来の印相と逆になっている。極楽殿には同じく三大金銅佛の一体である阿弥陀佛像が安置されている。観音殿から見下ろす佛国寺の各伽藍の屋根、その間に見える釈迦・多宝二塔の景観は壮観であった。

掛陵　佛国寺参拝を終え、統一新羅王朝の元聖王（七八五―七九八在位）の陵であると伝えられる掛陵へ向う。松林の中に開ける陵は芝生で覆われ、その緑の毛布に包まれたような色彩は強く印象に残る。円墳の大きさは直径二十米はあろう。陵の前の参道の左右に石人像・石獣が並び、特に中で異国風の武人像が人目を引く。当時この国に来て仕えたペルシャの武人を想像させられる。陵の周囲の石板に十二支像が刻まれ、各々自分の生年の像を探しながら陵を一周したことであった。

四天王寺址　四天王寺址は一面の草原の中に所々に礎石が見え隠れし、時の流れの中に消えた寺跡に荒涼たる感を懐く。四天王寺の草創については『三国史記』に「文武王十九年（六七九）四天王寺成る」の記録がある。（巻七、新羅本紀第七、文武王）また『三国遺事』には、「四天王寺の草創は文武王によるものであり、浪山の南側の善徳王陵の下に建てた」という。（巻一、紀異第一、善徳王知幾三事）更に、「文武王十五年（六七五）唐兵が来攻した時、明朗の勧めによって四天王寺を創すればよいということになったが事が急迫しているので、色帛で仮の寺をこしらえ、草で五方神像を作り、明朗を首として文豆婁という秘密法を使うと、風浪がおこり、唐軍はみな水中

に没してしまった。その後改めて寺を建て四天王寺とした。その後今日まで続いている」と記している。（巻二、紀異第二、文虎（＝武）王法敏）従って『三国遺事』が著者一然（一二〇六―一二八九）の晩年七十歳過ぎの六・七年（一二七五―一二八一・二）の撰述とされることから、高麗中期過ぎまでこの寺は存在していたことになる。この四天王寺の草創は日本の四天王寺の創建である用明天皇二年（五八七）より九十二年のちのことであった。礎石から寺域は金堂を中心に廻廊を廻らし、その内部に東西に塔の立っていたことが偲ばれる。

掘佛寺四面石佛　次いで慶州の東北方、小金剛山麓にある掘佛寺址の四面石佛へ向う。バスを降りて山道を暫く登った松林の中の窪みの中に方形の巨岩に刻まれた石佛がある。掘佛寺は今はない。この四面石佛については『三国遺事』に、「景徳王（七四二―七六五在位）が栢栗寺へ遊幸して山の下に至ると、地中から佛を唱える声が聞えるので、命じて掘ってみると大きい石があり、四面に四方佛が刻まれていた。よって寺を建て、掘佛をもって寺名とした。」という記事がある。（巻三、塔像第四、四佛山・掘佛寺・万佛山）佛像は高さ三米余の巨岩の四面に薄肉彫されており、西側の中央は阿弥陀佛の立像で、頭部のみ丸彫りとなっている。左右には二菩薩の像が脇侍としてある。更に東側には薬師、南側は釈迦、北側には弥勒の像が刻されている。これらの佛像には遠く印度のグプタ様式が受け継がれているといわれている。

芬皇寺　芬皇寺は新羅佛教史上最も高名な寺の一つ。草創については、『三国史記』に「（善徳王）三年（六三四）春正月改元仁平。芬皇寺成……」の記事がある。（巻五、新羅本紀第五、善徳王）また『三国遺事』には、「唐の貞観十七年（六四三）に善徳王の乞いによって帰国した慈蔵を国をあげて歓迎し、王が命じて芬皇寺に住まわせ、給与と護衛とを十分に与えた。」とある。（巻四、義解第五、慈蔵定律）またこの寺は新羅華厳の学僧として名高い元暁が住んだ寺でもある。このことについても『三国遺事』には、「元暁はかつて芬皇寺に住して華厳の疏を纂したが、第四十廻向品に至ってついに絶筆した。」と記している。（巻四、義解第五、元暁不羈）この記事から、元暁はこの寺に最晩年に住したことが知られよう。ここで著述した華厳経の疏というのが、現在大正大蔵経巻八十五に収められている元暁の華厳経疏巻第三なのであろうか。芬皇寺の境内には往時の伽藍はなく、草創当時のものとして、現存する新羅石塔の最古とされる三層の石塔がある。幅六・五米、高さ二・六米という韓国では他に比類を見ぬ大きな石塔である。もとは七層或は九層であったといわれるが、今は三層のみである。煉瓦形の安山岩を積んで塔身を築いている。この塔の形態は塼塔（煉瓦積みの塔）に倣っており、中国南北朝時代の特色を受け継いでいるという。これまで見てきた他の石塔とは全く異なり、外形はむしろ木造の塔に近い。第一層の四面には花崗岩で龕室を造り、入口の左右には仁王立像がある。塔の基壇の四方に獅子と海の方角に向いての海獣が珍らしい。小さな佛殿には薬師如来が安置されている。本尊の右の奥にこの寺に住した元暁の絵像

を拝することができた。慈蔵、元暁という二人の新羅佛教の代表的高僧が住した寺であることが我々の強い感銘を呼んだ。

皇龍寺址　芬皇寺の近くに皇龍寺址がある。現在発掘調査が進められており、伽藍の礎石が並び、往寺の規模の広大さを窺い知ることができる。この発掘調査は明年には完了するということであるが、佛国寺の数倍の規模であるという。皇龍寺については『三国遺事』巻三、『三国史記』巻四などに関係の記事が多い。近年、『佛教芸術』第九八号・九九号（昭和四九年九月・十一月）に黄寿永博士の「新羅皇龍寺九層塔の刹柱本記」の論文で詳しく報告がされていた。皇龍寺址をバスの車窓から見渡しながら通過し、慶州市内へ入って昼食をとる。

古墳公園・天馬塚　午後は新羅の王城、半月城址の近くにある新羅王族の古墳群一帯を公園とした古墳公園へ出かける。昨年整備を終えて公園として公開された。公園内には大小二十余の古墳がある。園内は雑草一本なく、ごみ一つ落ちていない。古墳をおおう緑の芝生も手入が入き届いており、実に美しい。内に天馬図で有名な天馬塚古墳がある。発掘調査のあと、古墳の構造が一目でわかるように古墳の内部の半分をくりぬき、断面が見えるようにし、博物館として出土品が陳列されている。

慶州国立博物館　一九七五年に現在の建物が新築され、古墳出土品や佛像が数多く展示されている。広い館内を全部見て廻るのは大変だ。質・量とも日本ではとても及ばぬ。博物館の前に有名な「エミレの鐘」と呼ばれる聖徳大王神鐘がある。鋳造は恵恭王七年（七七一）（『三国遺事』巻三）で、東洋最大を誇る巨鐘は、口帯と連珠紋帯に唐草紋を施し、鐘の表面には飛天像と鐘の来歴が刻まれている。実に美事な造りである。その音色がまた素晴しいというが、聞けなかったのは残念であった。がここに至って通度寺で不審に思っていた韓国の梵鐘の釣り位置の低さの意味がはじめてわかった。それは、鐘の直下に擂鉢形の穴があり、鐘の響きはその穴に反射して鐘の上部の龍頭部分にあるパイプから空中に高く響き広がるということであった。

新羅千年の都慶州を後にして、再び京釜高速道路を走り、人口一二〇万の韓国第三の都市大邱に着く。バスから見る大邱の町は柳の木が多く、街行く中学生達は日本の中学生と全く同じような制服で、重そうなカバンを抱えているのもよく似ている。

海印寺　第三日目。大邱の町からバスに揺られて約二時間、今回の旅の中で最も期待の大きい海印寺へと向う。海印寺は慶尚南道の北端、伽耶山にある。海印寺への道はうっそうと茂った松林の中を渓谷に沿って続く。進むに従って次第に渓谷も深くなる。道路の両側には桜の並木もあり、春の時、また秋には、松の緑と紅葉の織りなす自然の景観はすばらしいだろうと想像される。バスを降りて約一キロほど山道を歩く。この旅行中、残暑の厳しさに閉口していたが、松林を渡る涼風が心地よい。やがて、「法寶宗刹成佛門」の扁額を掲げる門を過ぎると、「伽耶山海印寺」の額のある山門に着く。いよいよ海印寺と心おどる。次いで「海東圓宗大伽藍」の扁額を掲げ、四天王像を安置する鳳凰門、更に解脱門を過ぎると、九光楼があり、次いで白砂が開け、大寂光殿がある。海印寺の草創については、『三国史

記』に、「(哀荘王)三年(八〇二)八月創加耶山海印寺」の記事がある。(巻十、新羅本紀第十、哀荘王)また海印寺で買い求めた海印寺発行の『海印寺誌』にも、「新羅哀荘王三年(八〇二)八月、王妃の背瘡を、順応・利貞の二僧が治し、王はそれに謝してこの地に寺を建てた。順応・利貞二師は華厳経の海印三昧にちなんで海印寺と命名した」という。然るに、先に梵魚寺草創について触れた所で、『三国遺事』の中に義湘が新羅文武王十六年(六七六)に浮石寺を建て、更に十ヵ寺に令を下して教書を伝えたという。その十ヵ寺の一つに「伽耶之海印」の名がやはり見える。同様に崔致遠の『法蔵和尚伝』にも「康州伽耶山海印寺」の名が義湘に関連した所に見える。これらのことから、この海印寺の草創も梵魚寺の場合と同様六七六年以前に遡ることができることになる。大寂光殿内の本尊は毗盧遮那佛である。大寂光殿の裏に「八萬大蔵経」の扁額の門が石段の上にある。漢訳佛典に親しむ者にとって、この中にある高麗版大蔵経はまさに法宝そのものである。特別に経庫の内を拝観することができ、経庫に足をふみ入れると五段にぎっしり版木が納まっている。まさに感激の極みである。わが大谷大学にも所蔵している高麗版大蔵経の故郷でもあり、一層親密感が深い。統一新羅を継いだ高麗は九一八年に建国し、九三六年に完全な統一国家を作って一三九二年まで続く。高麗王朝は新羅と同様に佛教を尊崇、保護した。又高麗の佛教は度々外寇に対して国家の危急を防ぐ為に利用されたことがある。八代顕宗王(一〇一〇―一〇三一在位)時代に契丹の攻略という国難に対して、その二年(一〇一一)勅をもって大蔵経の刊行がなされている。十一代文宗王の子、大覚国師義天は続大蔵経を刊行したが、高宗十九年(一二三二)、蒙古の侵略に遇い、これらの初雕版の版木は全て焼失してしまった。その後、高麗王朝は都を江華島に移すが、佛教の功徳によって外敵を防ぐために、大蔵経の再雕を発願し、高宗二十三年(一二三六)から同三十八年(一二五一)に至って完成したのが現存する高麗版大蔵経の版木である。この版木は江華島から福源寺に移り、のち李朝の太祖七年(一三九八)に支天寺へ移され、更に翌年(一三九九)現在の海印寺へ移されたものである。経板は両面に刻まれており、一面二十三行で、一行十四字であり、全部で八一二五八板ある。この数から八萬大蔵経の名がつけられている。経板は渠材木(樺木材)を三年海水に浸してから乾燥させて虫害を防ぐ方法がとられている。経庫は二棟あって、前方が修多羅蔵、後方が法宝殿という。経庫の内部は通風に工夫が凝らされ、又防湿のために土に塩と木炭を混ぜて固めてある。数次に及ぶ火災にも、この経庫のみは被害を逸れ、李朝の太祖七年(一三九八)の創建当時のままである。海印寺の他の建物は二百年ほど前に再興されたものという。興奮醒めやらぬ海印寺経庫を後にして再びバスで次の目的地俗離山へと向う。

俗離山法住寺　海印寺から大邱まで又戻り、京釜高速道路を北西に走って、新羅と百済の戦の要地であった秋風嶺で休憩。四時間のバスの旅で忠清北道の山々に囲まれた俗離山に着く。俗離山は名のとおり人里を遠く離れた深山であって、あたり一

帯は国立公園に指定されている風光明媚な地である。ここには法住寺がある。バスを降りて、山門までの参道を歩く。針葉樹やくぬぎの原生林が茂る。途中アケビを売る少年に会い、懐しい味を楽しみながら歩く。法住寺は、『朝鮮古寺刹史料』上、によれば、「初剏は新羅二十三世真興王十四年（五五三）に義信和尚が天竺より帰り、白騾に経を乗せてこの山に入り堂舎を創建し法住寺と名づけた」という。（同書一二七頁）現在の法住寺の捌相殿は李朝仁祖二年（一六二四）の建造で、木造の五重塔である。木造の塔としては現存する韓国唯一のものといわれている。大雄殿も同じく仁祖二年の再建で、李朝の代表的建築とのこと。夕闇迫る法住寺の一隅に自然石に浮き彫りされた磨崖如来像を拝して法住寺を辞してホテルに入った。俗離山の夜はさすがに涼しく深山の霊気が印象に残った。

甲寺　第四日目は俗離山を早朝六時に出発。朝もやの俗離山を後に二時間半、これまでとはちがって細い凸凹の山道をバスに揺られ、忠清南道の鶏龍山甲寺へ。バスの窓からは山あいの村が点在し、何かもの淋しい情景である。鶏龍山は一帯を国立公園に指定されている。山登り姿の若者のグループに何組か出会う。バスを降りてから、昼なお暗い原生林の中の凸凹道を登っていくと甲寺の山門がある。「鶏龍甲寺」の額を掲げる講堂は、もと彩色が施されていたのであろうが、長年の風雨に洗われて、今は黒ずんだ木膚の木目を浮かばせている。境内の案内文によると、この甲寺は百済久爾辛王元年(四二〇)阿道和尚の創建という。講堂の前の鐘楼の鐘は李朝宣祖十七年(一五八四)の作。大雄殿は李朝高宗十二年（一八七五）の再興で、堂宇には彩色が施されている。本尊は釈迦佛。大寂殿の前にある浮屠は高麗時代の作とされ、全面の彫刻が雄大で気魄に溢れ、各部の変化は見事なものである。八角の基台の上に三重の下台があり、塔身の八角には四天王像が刻まれている。ここから草深い細く急な坂道を下った所に鉄の幢竿がある。統一新羅文武王十九年（六七九）に建てられたもので、石の支柱（三米）の間に高さ十五米の鉄製の旗竿が立っている。直径五十cm、長さ六十cmの鉄筒二十四個を連結して建てられている。もと二十八個あったが、李朝高宗三十五年（一八九九）暴風雨で四個を失ったとのこと。

麻谷寺　甲寺を後にして、また同じく凸凹道をバスに一時間余り揺られて忠清南道の麻谷寺へ向う。バスを降りてから清流沿いに歩いて麻谷寺の解脱門に至る。麻谷寺の創建は統一新羅興徳王（八二六―八三六在位）といい、麻谷寺の名は二代目住持の名に因むという。しかしここもこれまでの各地の寺と同じように壬辰の乱で焼失し、李朝顕宗二年（一六六一）に再興された。壬辰の乱でこんな山奥にまで倭軍が侵入して佛殿を破却したのかと、改めて壬辰の乱の傷跡の広く深いことを知らされた。麻谷寺を後にして再びバスへ。車窓から見える家々は藁葺屋根で、川には洗濯をする女の人達、田圃道には赤牛が草を食むといった韓国の農村の旅情に浸る。

扶餘　二時間ほどのバスの旅で百済の都扶餘へ着く。日本へ佛教を伝えたのをはじめ、わが国古代国家生成期にその文化を

伝え、飛鳥の文化を今日に残すのも皆百済から受けた恩恵であった。百済の建国は始祖温祚王により紀元前十八年に遡る。それから六七八年間、優れた文化を誇りながら、義慈王二十年（六六〇）新羅と唐の連合軍の攻略にあい、その幕を閉じた。扶餘は聖王十六年（五三八）に公州から還都し、百済滅亡までの一二三年間の都であった。扶餘に着くと、今や遅しと、扶餘文化院々長である李夕湖先生の出迎をうける。先生は百済の文化を愛し、亡ぼされてしまった故国の文化遺産を発掘し、後世に伝えるべく奔走しておられ、百済に対する愛惜の念が口をついて激しく吐露される。一行は扶餘の町を育んで流れる豊かな白馬江を船で、百済王朝滅亡の哀話を伝える落花巌の下を過ぎ、皐蘭寺に参詣する。遠く日本の難波津まで続くという白馬江の流れには、百済滅亡時、援軍としてこの地に来、敗れた古代日本の兵士達も眠っている。皐蘭寺は、百済滅亡の時、落花の如く白馬の流れに身を投じたという三千の宮女の冥福のための寺で、この寺の裏に湧く清水を王が薬水として用い、そこに自生する皐蘭草の名に因んで名づけられたという。

扶餘国立博物館　百済王宮の跡に位置するというこの博物館は一九七一年に竣工された。入口の門は日本の神社の鳥居を連想させ、建物の屋根も、いわゆる大社造りとよく似ている。新しい建物であるが、日本の古い神社の形を見る想いであって百済の文化との親密性を感じる。李先生によれば、新羅は佛塔を、高句麗は壁画を、そしてこの百済は瓦の文化を残した。この扶餘博物館には数多くの瓦と文様塼が蔵されており、わが国の飛鳥寺や山田寺出土の瓦と同じ蓮華紋の軒丸瓦がみられ、飛鳥文化の故郷としての百済が一目瞭然であった。

百済塔　百済の佛教文化財はほとんど残ってはいない。日本への佛教伝来の故国である百済に佛教遺構のほとんどないのは淋しい限りである。その中で、定林寺跡に残された百済塔は、百済佛教の唯一の現代への語りかけである。塔は五層の石塔で、木造様式を留め、素朴ではあるがどっしりした構造の中に、百済石塔初期の様式を伝えている。この塔には新羅と共にこの国に侵入した唐の将軍蘇定方が、百済を平定した記念に戦勝記念文を唐の顯慶五年（六六〇）の年号と刻みつけた。佛塔に戦功を刻むという冒瀆は許し難い。慌しい扶餘の数時間であったが、夕暮の残陽をあびる百済塔と扶餘の町は印象的な光景であった。

ソウルへ　第五日目。百済の都扶餘を後にして、いよいよ最後の訪問地であるソウルへ向う。途中、韓国民俗村に寄る。一九七四年につくられたこの民俗村には広大な敷地に李朝時代の民家が立ち並び、民具や伝統技術を保存している。やがてバスは韓国の都ソウルへ入る。李王朝の都として栄えたソウルは現在も人口約七〇〇万を擁し、現代韓国の政治・経済・教育・文化の中心地である。或いは近代国家韓国＝ソウルといってもよかろう。これまでの新羅・百済の古い寺々を廻って来た一行にとっては数百年を一気にとび越えた様な戸惑いを覚える。李王朝の宮城、景福宮を見学。仁政殿の礎石に韓国動乱の時の砲弾の跡を留め、韓国の長い戦いの歴史の今なお続いていることを想う。

東国大学校　曹渓宗の宗門立大学であり、わが国佛教学界と

も親密な交流のある東国大学校を訪問する。あいにく佛教大学の主任教授である金雲岳教授急病とのことで、行政課長をしておられる教授にお話しを伺った。経済学が専門とのことで、現在の東国大学校での佛教学の様子など詳しく知ることのできなかったのは残念なことであった。尤もこの大学も宗門立とはいえ、現在は総合大学として発展しており、佛教大学（日本でいう佛教学部）への学生は少数のようであった。日本の宗門立大学のそれと同じ傾向であろうか。佛教大学は佛教学科・僧伽学科・美術学科・哲学科・印度哲学科などから編成されている。

金知見博士と　その夜の食事は久々の日本食で、やっと一息ついた。韓国佛教学界の第一人者として日本の佛教学界にもなじみの深い金知見博士が夕食に同席され、色々とお話しを聞く。博士は目下、曹渓宗の僧伽大学建設の準備で東奔西走しておられるとのこと。また戦前京城大学を中心として行われていた韓国佛教及び歴史についての日本の研究者の業績が、今日、日韓両国の学界から余り顧みられていないが、ぜひそれらの研究を今日再評価したいと思っているとのことであった。食事の後、金博士に案内していただいてソウルの佛書屋を二、三軒歩いた。

韓国々立中央博物館　第六日目。韓国旅行最後の日。五千年の歴史の韓国を南から北へ、それは百済・新羅そして李朝という歴史を僅か六日間で通り抜けることになる。景福宮内にある韓国々立中央博物館見学へ。日本の広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像と関連深いといわれる金銅の弥勒菩薩半跏思惟像の前で足をとめ、改めてなるほどと思いながら、目録を購入して、筆者は、一行と別に足早にこの博物館を廻って、市中の本屋へ出かけた。

梨花女子大博物館　最後の訪問先は名門といわれる梨花女子大の博物館。ここには考古遺物・調度品・装身具などが陳列されているが、最も目を引かれたのは李朝青磁・白磁などのコレクションである。

最後に韓国の現在の佛教界についてであるが、聞く所によると人口の約三分の一が佛教徒ということであり、その中の四分の三が曹渓宗で、他に十七の宗派があるという。これまで訪れた古刹はいずれも曹渓宗に属している。

しかし、人里遠く離れた山間に位置する寺院ばかりで町の中の寺院は見えなかった。この旅で気づいたことの一つに、車窓からのながめで、どんな小さな田舎の町へ行っても必ず立派な教会の目に入ることであった。教会の数は多く、しかも町の中にあり、人々の日々の信仰はキリスト教による者が多くなっていく傾向にあるのではなかろうかと思う。人口の三分の一に当る一二〇〇万人が佛教徒というが、それに比して佛教徒の約半数に当る五六〇万人（内プロテスタント四六〇万・カソリック一〇〇万）がキリスト教徒であるという。日本での比率から見るとキリスト教徒の多数に驚く。いずれにしても韓国佛教界の現状については日本のそれとは異っていると思うが、それらの話を充分に聞くことの出来なかったのは残念なことであった。

以上韓国の寺院・佛教史蹟の旅を終え、改めて韓国佛教に対する知識の乏しさと、その研究の重要性を身に泌みつつ帰国の途についた。

（昭和五十二年十月十日稿了）